

静岡県の茶業者が台湾緑茶の輸入を真剣に考えていた頃

<1966～67年の記録を辿って>

1. 時代背景

- ①高度経済成長期における国内の茶の需要拡大、茶価の高騰
- ②労働賃金の上昇を主因とする茶生産コストアップの中で、中共(現中国)や台湾など、緑茶生産国との輸出競争に苦戦していた。これを打破するために、「台湾緑茶を輸入して、日本茶とのブレンドにより再輸出」する方法で、北アフリカ市場に再度活路を見出そうとした。
- ③コストダウンを図り、生産体制を増強するための茶園の整備は緒に就いたばかり。
南九州地域での茶園造成、また静岡県内では「小笠広域農業経済圏」構想に基づく茶園の品種化と大規模造成<パイロット事業>に着手して間もない。

一時的、暫定的に下級茶の輸入が急務となった。



北アフリカ市場(モロッコ)への日本茶(緑茶)輸出量の推移

(単位:t)

年度	モロッコ
1949	1,503
...
1953	-
1954	-
1955	1,267
1956	1,591
1957	2,252
1958	1,017
1959	2,077
1960	3,357
1961	2,517
1962	1,009
1963	182
1964	115

輸出好調

不振

'63年度の輸出茶激減(前年比80%以上の減少)モロッコ向け輸出は皆無に近い状態となる。

資料:茶業名鑑1949年版,および新茶業全書1966年版を基に作成
注:-は調査数値不明



歓迎 中華民国製茶工業日本考察団 於静岡市浮月 4.11.44.